

# 地質情報展 2013 みやぎ 展示と解説のコーナー 東北の火山及び蔵王火山の展示報告 ～どのように見学者の興味を引く展示をつくるか～

及川輝樹<sup>1)</sup>・西来邦章<sup>1)</sup>

## 1. はじめに

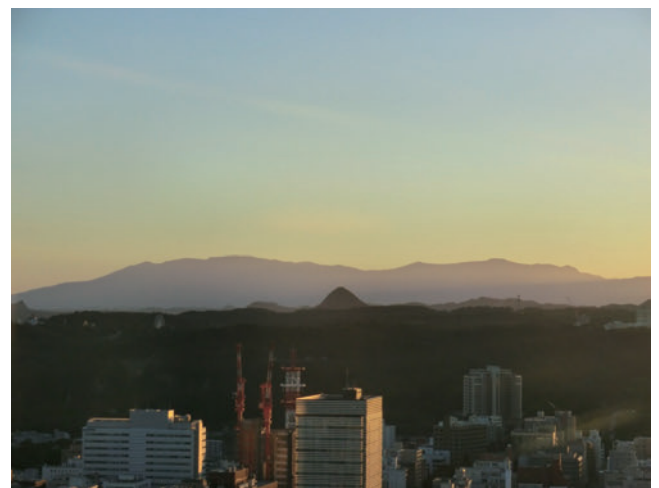
仙台市科学館で行われた「地質情報展 2013 みやぎ」では、南東北を代表する活火山、蔵王火山の紹介を他の南東北の火山の紹介とあわせたパネルを作成し展示しました(第1図)。その展示には、折しも当所から「日本の火山(第3版)」(中野ほか, 2013)が発行されましたので、その成果も盛り込みました。嬉しいことに、これら展示は来場者へのアンケート結果によると大変好評でした。蔵王火山は仙台市からも望むことができる火山なので(第2図)、親しみがあつたためもあるかと思われませんが、展示にもちょっとした工夫を施しました。いずれもちょっとした工夫で実現できるもので、難しくありませんが、見学者の興味を引き付ける効果は、我々が想像していた以上に大きいものでした。どのような工夫を施したのかをここで簡単に紹介します。

## 2. パネル中の文字数

博物館や野外での看板の説明については、次のような経験則が知られています(例えば、原・福野, 2004; 木下, 2009)。①立ったまま集中して読めるのは150字程度、長くても200字程度に抑えるのがよい。②簡単な解説は200字程度、こみいった内容でも400字程度に抑える。一文中の文字数は、30字程度(25～50字)がよい。前回の情報展の観察では、多くの見学者が一枚のパネルの前に滞在して見学する時間は、20～40秒台でした(第3図)。つまり、この程度の時間で理解できる展示をつくる必要があります。この時間の中に、図や写真も見て文字も読むとしたら、やはり多くても400字程度の文字しか読めないでしょう。そのため、つい詳しく説明したくなりますが、パネルに載せる説明はぐっと抑えて、文字数を少なくしました。一つの話の説明は、なるべく200字以下に抑えて、長くても400字を超えないように心がけました。



第1図 展示の様子。



第2図 仙台駅前の高層ビルから望む蔵王火山。右側奥の一番高いピークが蔵王火山の最高峰である熊野岳(1841m)。2013年9月撮影。

## 3. 絵は大変有効—写真と絵(スケッチ)のよる展示

火山は美しい景観をつくり、ひとたび噴火するとその迫力は大変なものです。そのため、それらの綺麗な写真はパネル展示の目玉となります。しかし、最近は、広告やネット上で綺麗な写真が溢れているので、少々の写真では人を引き付けられません。そのため、なるべく美しく迫力があ

1) 産総研 地質情報研究部門

キーワード：蔵王火山, 活火山, 展示, 実験, 滞在時間

る写真を集めるよう心がけました。ただ、迫力がありかつ使用できる写真を探すのはなかなか難しいのも事実です。そのため妥協した点多々あります。しかし、色が悪い、露出が適切でない、ぶれているなどの写真の使用はさげました。

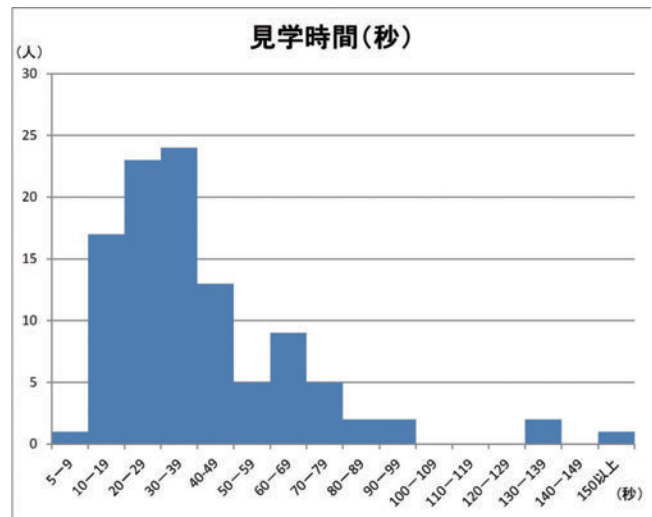
一方、絵（スケッチ）は、写真と比べて迫力さに大きくかけてしまうところがあります。しかし、2008年に秋田で開催された情報展で、鳥海山の江戸時代の噴火を記した絵を展示したところ、これが意外にも好評でした（及川ほか、2009）。初めは興味なさげに見学していた人も、絵のところはじっくりと足を止め見学していたのです。研究者としては、より客観的な写真による展示のほうが好ましいと思っていたので、この結果は意外でした。そこで今回の情報展でも、蔵王山の明治の噴火のスケッチもパネルに展示しました。仙台でも同様に、足を止めてスケッチを見る見学者が少なからずおりましたので、一般的に写真による表現（展示）に比べ、絵（スケッチ）のほうがより訴えるものが大きいのでしょうか？ これは興味深いところです。

#### 4. 簡単な実験コーナーの併設－パネルの前に足を止めてもらう

文字や写真だけの展示だと、大人にも子供にもなかなか足を止めてもらえません。強く興味を持った人にしか足を止めてもらえないのが現実です。しかし、ちょっと手で触れることのできるもの、自分が参加できるものがあると多くの人に足を止めてもらえます。そこで、パネルの前に簡単な実験コーナーを併設しました。今回設置した“ミニ”実験コーナーは、水に軽石を浮かす実験です。この“ミニ”実験コーナーは、2007、2008年の情報展と繰り返し実施しており（及川ほか、2009）、簡単な割に効果が絶大です。解説者が付きっきりでなくても見学者が自主的に行えることが魅力です。ただ、周りが濡れないよう水の始末は必要です。

#### 5. 触れる標本－実物の魅力

いくら綺麗で迫力のある写真や絵を集めても、実物の迫力にはかないません。そのため、手標本サイズの触れる標本をパネルの前に展示しました。実際に感触を確かめるといのは、五感に訴え印象に残ります。そのため、多少乱



第3図 見学者が一枚のパネルの前に立ち止まる時間のヒストグラム。のべ104名を「地質情報展2012 おおさか」の展示時に観察。5秒以下しか立ち止まらない見学者は、計測していない。

暴に扱っても壊れないような岩石や火山弾を展示しました。会場では、これらの展示物を実際に触りながら、親子の会話が弾んでいるのが、けっこう見られましたので、触れる実物標本の魅力は大きいでしょう。

#### 文 献

- 原 礼子・福野明子（2004）博物館におけるリサーチ・ライティングについて。国立民族学博物館調査報告，no. 49，83-92。
- 木下周一（2009）ミュージアムの学びをデザインする－展示グラフィック&学習ツール制作読本。ぎょうせい，東京，228p。
- 中野 俊・西来邦章・宝田晋治・星住英夫・石塚吉浩・伊藤順一・川邊禎久・及川輝樹・古川竜太・下司信夫・石塚 治・山元孝広・岸本清行（2013）日本の火山（第3版）。産業技術総合研究所地質調査総合センター，29p., 1 sheet。
- 及川輝樹・古川竜太・下司信夫（2009）地質情報展2008 あきた秋田の活火山－火山その噴火の驚異とめぐみ－。地質ニュース，no. 658，25-26。

OIKAWA Teruki and NISHIKI Kuniaki (2014) How to create exhibition to attract visitors. Report of “Volcanoes in Tohoku Japan (NE Japan)” and “Zao Volcano” in the Geoscience Exhibition in Miyagi 2013.

（受付：2013年11月15日）